第 19 回 広島大学「文藝学校」

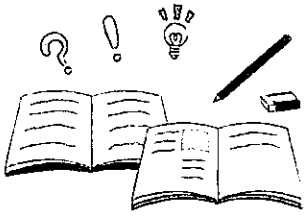
（広島大学文学部 ゼミナール）

今回の「文藝学校」講演会は、久方ぶりの対面での開催となります。

キャッチフレーズは、「人と人とをつなぐ人文学。」
広島大学文学部の講義を体験してみませんか。全講義を受講いただくのも良し、選択受講いただいても良し。
多数のご参加をお待ちしております。

【日　時】2023 年 8 月 27 日（日）10：30～17：00

【会　場】本の学校 2 階 多目的ホール



【受講料】無料

【参加申込み】お電話・メール・ファクスで「お名前・ご連絡先」をお知らせください

申込〆切　8 月 26 日（土）

【講師と演題】　（各講義の要旨は裏面をご参照ください）

1.　10:40～11:40　宮川朗子（フランス文学語学分野　教授）
　「珠玉のエンタメ小説、「シェリ＝ビビ」シリーズの世界」

2.　11:50～12:50　今林　修（英語学分野　教授）
　「英語の小説における「話法」を考える」

第 19 回　広島大学「文藝学校」(広島大学文学部 ゼミナール)　申込書

2023(令和 5)年　8 月　27 日　(日)　10 時 30 分～　開催

受講希望の講義に○	講義名	講師	要旨
	10:40～11:40 珠玉のエンタメ小説、「シェリ＝ビビ」シリーズの世界	宮川朗子	ミュージカルで有名な『オペラ座の怪人』の原作や、密室殺人の謎を解く古典的作品『黄色い部屋の謎』の作者であるガストン・ルルーは、今日まで語り継がれているもう一人の怪人シェリ＝ビビの生みの親でもありました。「永遠の囚人」シェリ＝ビビを主人公とする小説は、ベル＝エポック期のフランスで話題となり、3 作を数える人気シリーズとなりました。今回は、日本ではほとんど知られていなかったものの、昨年翻訳が出版されたシリーズ第 1 作目『シェリ＝ビビの最初の冒険』を中心に、このシリーズの魅力をお伝えします。時間が許せば、この小説の翻訳こぼれ話もお話しできればと思います。
	11:50～12:50 英語の小説における「話法」を考える	今林　修	最近の高等学校の英語の授業では「話法」についてほとんど教えなくなりました。少なくとも 1980 年代前半までは、リーダーや英文法の授業において、直接話法と間接話法の相互書き換えはもちろんのこと、描出話法(自由間接話法)までも扱っていました。英語で書かれた小説において「話法」の果たす役割は非常に大きく、実際の例をつぶさに観察しながら、「話法」(提示法)の種類とその役割について解説しようと考えています。